



2021年1月10日 説教「見えざる終の棲家」

創世記 46章 1～7 節

久しぶりにヨセフの生涯の学びにもどります。兄弟達との再会をしたヨセフは、飢饉に苦しむ父ヤコブの家族をエジプトに呼び寄せる道筋をつけ、パロもそれに後押しをしてくれ、いよいよそれが実現の運びとなります。

1. ベエル・シェバでの呼びかけ (1～2 節)

- ①出発 (1) 「イスラエルは、彼に属するすべてのものといっしょに出発し、」死んだと思っていたヨセフがエジプトの宰相となっていると、知らされたイスラエル(ヤコブ)は、様々な証左からそれを納得しました。そして、促されるままにカナンの地を出発することを決意したのです。そして一族郎党、家畜などの財産のすべてを携えて、その地から旅立ちました。この時点では一時的な旅と考えていた事でしょう。
- ②ベエル・シェバ (1) 「ベエル・シェバまで来たとき、父イサクの神にいけにえをささげた。」ヘブロンあたりから出発した一行は、ベエル・シェバに到着します。ベエル・シェバはヤコブ自身が両親とともに過ごした地であり、ハガルがイシュマエルと放たれて、その地の荒野をさまよった所(21章)。またイサクが井戸掘りをして一家を守った後に導かれた地(26章)でありました。ヘブロンからエジプトに向かう時には必ず通りかかる要所でもありました。そこで、イスラエル(ヤコブ)は、父イサクの神にいけにえをささげたのです。要するに、神に礼拝をささげたのです。もちろん、その神とは、ヤコブ自身がパダン・アラムに向かう途上などにおいて、親しき交わりと導きをいただいた神であることは言うまでもありません。
- ③主の呼びかけ (2) 「神は、夜の幻の中でイスラエルに、『ヤコブよ。ヤコブよ。』と言って呼ばれた。彼は答えた。『はい。ここにいます。』」夜の幻の中で、神はヤコブに呼びかけられたのです。「ヤコブよ。」と。彼はすぐに「はいここにいます」と応えました。少年サムエルは寝ている最中に「サムエル」と呼ばれても、それが誰であるのか、わからずに、師であるエリのもとに、「お呼びですか」と三回も行ったのです(1サムエル2章)。その面ではヤコブはすぐに、これは主の御声だと気づかされたのでしょうか。「はい」と応えました。祈りのうちに、主の促しが与えられた時に、私たちができることは、主への答えとして御言葉を確かめていくことです。

2. 大いなる国民にする (3～4 節)

- ①あなたの父の神 (3) 「すると、仰せられた。『わたしは神、あなたの父の神である。』」その方は仰せられたのです。「わたしは神、あなたの父の神である。」と。つまり、アブラハム、イサクを導かれた神であ

ることを伝えてくださっているのです。「神」は元の言葉では「エル」です。創造主なる方です。ヤコブにとっては、父や祖父を導いてくださった神が、自分をもここまで導き、またこれからの歩みをも導いて下さる事を実感し、その魂は強められたことでしょう。

②恐れるな (3)『**エジプトに下ることを恐れるな。わたしはそこで、あなたを大いなる国民にするから。**』その神がエジプトに下ることを促し、「恐れるな」と励まして下さっているのです。そして、さらに「わたしはそこで、あなたを大いなる国民にする」とまで語ってくださっているのです。かつて、主は「あなたの子孫は地のちりのようになる」(28:14)と約束してくださいました。「あなたの子孫を多くて数えきれない海の砂のようにする」(32:12)とも約束されました。ここでも、同じ約束をくださっているのです。

③再び導き (4)『**わたし自身があなたといっしょにエジプトに下り、また、わたし自身が必ずあなたを再び導き上る。ヨセフの手はあなたの目を閉じてくれるであろう。**』そして、主はいつもヤコブとともにあって、エジプトに導き、やがての日に、主が必ず再びカナンに導いてくださると約束されるのです。しかし、一方では子でありエジプトの宰相であるヨセフが、ヤコブの目を閉じてくれると言われるのです。つまり、その死をみとってくれるというのです。

3. すべての携えての旅 (5~7節)

①ベエル・シェバを立ち (5)「**それから、ヤコブはベエル・シェバを立った。イスラエルの子らは、ヤコブを乗せるために、パロが送った車に、父ヤコブと自分たちの子や妻を乗せ、**」主との交わりをいただいた後に、やオブはベエル・シェバを出立します。エジプト王、パロから提供してもらった車(45:19)には、ヤコブと子供達や妻を乗せたのです。これがなければ、なかなかヤコブもエジプトに行こうとする勇気がわかなかったことでしょう。その車があったからこそ、ヤコブはエジプトまでの道を進むことができたのです。

②家畜、財産、子孫達も (6)「**また彼らは家畜とカナンの地で得た財産も持って行った。こうしてヤコブはそのすべての子孫といっしょにエジプトに来た。**」カナンの地で得た財もちろん持って行きました。家畜も財のうち、その他には金銀もあったことでしょう。エジプトへの道を進んだのは、彼の一族すべてでした。彼らがそろってエジプトへの道を進んだのです。大移動です。

③エジプトに到着 (7)「**すなわち、彼は、自分たちの息子たちと孫たち、自分の娘たちと孫娘たち、こうしてすべての子孫を連れてエジプトに来た。**」11人の息子達と孫たち、また娘たちと孫娘たち。ともかく、カナンの地に住んでいた、一族が一人も漏れることなく、エジプトの地に向かい、そして、ついにエジプトに到着したのです。

《結論》

私たちに、こここそ終の棲家と思いつけている所があるかもしれません。それが場所の場合もあれば、家の場合もあれば、はたまた教会の場合もあるかもしれません。

ヤコブも20年間過ごした北の地パダン・アラムにいる時には、カナンこそが、その場所であると思いつけていたことでしょう。そして、困難を越えて一族でカナンの地に到着し、エサウとの和解も果たし、子供達もたくましく成長していきました。12人の息子達に恵まれ、順風満帆でありました。ところが、愛する11番目の息子ヨセフを失い、カナンの地における生活にも、心の中には痛みがありました。しかし、時間が経ってみると、ヨセフがその兄弟達のいじめによっていたとはいえ、エジプトに送られて行ったのにも意味がありました。それは売られていたヨセフ自身が述べているのです。即ち、エジプトの宰相になっていたヨセフはこう言いました。「今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。」と(45:8)。世界の飢饉という試練の中で、ヤコブの指示でエジプトに出かけた兄弟達は2回目にヨセフとの再会の喜びを与えられました。そして、パロの応援もあって、ヨセフの父ヤコブとその家族がエジプトの最良の地ゴシェンで、食糧の心配をすることなく生活する道が開けたのです。ヤコブはカナンの地こそ、自らの死に場所と考えていたでしょうが、その最晩年はエジプトで過ごすこととなったのです。それも愛する息子ヨセフが宰相としている地というのですから、人生がどのように展開するかなど、誰もわからないのです。

今朝の聖書箇所にはもう一つのメッセージが記されていました。つまり、かつてヤコブは北の地に向かう途上、ベテルにおいて石を枕として休み、夢を見て、主から「あなたの子孫はちりのようになり、あなたは西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される」(28:14)という約束をいただいていた。また、エサウとの再会の前に、マハナインやペヌエルにおいて、神との交わりと祝福の約束もいただきました。そうした祝福の約束のすべては、カナンの地において果たされていくとヤコブは想定したかもしれませんが、しかし、不思議にも神は、イスラエルの一族を守るために、エジプトに送り、その地においても、祝福の約束の実現の一端を示してくださいろうと、主はしてくださっていたのです。

主のなさることは、私たちの考えを越えています。こここそ終の棲家と考えていることが、全く考えてもいない展開になっていく。とすると、私たちの終の棲家は、見えるものではなく、主御自身であり、目指すところも永遠の都であるということがわかるのです。私たちは、見えざる主を見上げ、その方を信じて、この年も一步一步、進んでいきたいのです。コロナ禍であっても、永遠の主を信じて、歩んでいきましょう。